

国際医療福祉大学大学院

大川キャンパス 学籍番号 10S1108 古川久美子

ゆきさんへ

私が看護師として働くうえで、また、看護教員として教える立場になった今も私の看護観・死生観の核となる考えを教え導いていただいたデーケン先生との今回の出会いを大変楽しみにしていました。

23年前の出会いを昨日のここのように覚えています。講義、そして、今はなき恵比寿のビアホールで「野バラ」を下手な発音のドイツ語で肩を組んで歌ったあの時の画像が鮮明に脳裏に浮かびます。

あの時から、「よく死ぬためにはよく生きること」「よく死ぬためにはよく生きること」が常に看護と私自身のライフワークの核となっています。死に向かって生きている人間＝患者が、より死に近くなってしまった時、自分らしく生き、後悔することなく死を迎えるためにどうサポートしていくのかを考えながら看護をしてきました。私自身、いつどんな時に死を迎えても後悔しないように今を生きていくのにどうしたらよいのかを考えています。そして、看護教員になった今、そんな考えを持って患者さんをサポートしていくことの大事さ、また、そのためには学生自身が「よく死ぬためにはよく生きること」を考えながら生きて欲しいことを伝えています。

23年前、デーケン先生が講義後お帰りになる時、広尾の学校の敷地を歩きながら、京都の本願寺の僧侶が死の準備教育のため壇家に話に行っても拒否されていることと、苦しい時の神頼みという宗教的な支えがない日本人に死の準備教育は困難ではという質問をしました。その時、「だからあなたたちに頑張ってもらって欲しい」と先生は答えられました。臨死期にある患者さんと常に接する職場にあって何もできない自分に悩んでいた私は「苦しんでいる患者さんが人生を全うし良く生きていくために私にできることがあるんだ、頑張ろう」と思うことができ、あの時エネルギーをいただきました。

看護教育に携わってからは、死とともに日々を過ごす患者さんを看護するために、看護学生が恐怖の対象である死を身近に考えることができるよう関わり、8年前からその教育方法を研究しています。

私が看護教師として今学生に看護を伝えていけるのはデーケン先生との出会いがあったからです。23年前の先生との出会いに、あの時からずっと感謝していました。まず、その思いを伝えさせてください。

今回の講義で、衝撃的な経験をされたにもかかわらず、講義やDVDでいつもユーモアいっぱいにとやかに話される先生がどのように乗り越えられたのかを質問させていただきましたが、先生に大変辛い思いをさせてしまい本当に申し訳ございませんでした。お話を聞いていて辛くて涙があふれてしまいました。そして、ナイティンゲールに看護を「Calling」と言わせた神様＝宗教について考える機会となりました。

また、患者のサポートの仕方、サポートするためには学生自身が「よく死ぬためにはよく生きること」を考えながら生きて欲しいことを伝えてきたにもかかわらず学生の自殺という大きな衝撃から、研究や日々の看護教育に辛い思いをしている今、少し整理をする機会となりました。

看護者として、人生を生きる個人として大変大事な時に一筋の光を与えてくださったデーケン先生との出会いに感謝しています。そして、その出会いをくださったゆきさんに感謝しています。

デーケン先生、ゆきさんありがとうございました。